JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	認知症高齢者を受容する価値観創造のための社会システムの構築
Author(s)	山崎，竜二；藤波，努
Citation	第五回知識創造支援システムシンポジウム報告書：24-31
Issue Date	2008-03-14
Type	Conference Paper
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/4416
Rights	本著作物の著作権は著者に帰属します。
Description	第五回知識創造支援システムシンポジウム，主催：日本創造学会，北陸先端科学技術大学院大学，共催：石川県産業創出支援機構文部科学省知的クラスター創成事業金沢地域「アウェアホームのためのアウェア技術の開発研究」，開催：平成20年2月21日～23日，報告書発行：平成20年3月14日

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

認知症高齢者を受容する価値観創造のための社会システムの構築

山崎　竜二　　藤波　努
北陸先端科学技術大学院大学　知識科学研究科
{ ryuji-y, fuji } @jaist.ac.jp

[概要] 近年、急増する認知症高齢者をめぐり、行政課題として認知症・介護の予防事業が喫緊のものとして浮上してきた。市と連携した事業の検討からアクション・リサーチを進め、コミュニティ・ケアの方法論を探る。本研究の目的は高齢者の秘めた力を引き出し有効に活用すると同時に、認知症高齢者が地域に受け容れられる仕掛けとしての社会システムを構築することにある。プロジェクト全体の流れをつくる第一段階と、予防事業における問題の本質を探る第二段階に分かれる。まず回想法を発展させ、児童が校区高齢者の体験談を作品化し、創作劇を媒体に認知症高齢者とのセッションを行う手法を取った。高齢者の思い出という知識資源を子どもの教育に活用し、認知症高齢者の秘めた力を発揮できる環境を整えて身近な理解が地域の人々に浸透する仕組みを築いた。認知症やその状態にある人に対して、実際セッション前に児童の多くは病態としての理解を得てもなお恐怖や哀れみを記述していた。この検討課題を考慮し、プロジェクトの第二段階として論点の深化を図る。認知症の病気としての説明以前に、さまざまな不自由を抱えていく老いの捉え方を主題として取り上げ、高齢者と子どもと共に老いゆくことの価値を探る。本プロジェクトにおける地域社会のシステム構築はその枠組みに加え、この臨床哲学の取組みを内実として予防事業に本質的な方向性を付与するものである。人々が世代を越え、認知症の人と共に生きるなかで価値観を成熟させる創造的なコミュニティのあり方を検討し、少子高齢社会に対応する社会システム構築の根底的な論点を追究する。

Constructing a social system for creating values and attitudes that accept the elderly citizens with dementia

Ryuji YAMAZAKI and Tsutomu FUJINAMI
School of Knowledge Science
Japan Advanced Institute of Science and Technology

[Abstract] In Japan, dementia prevention is an urgent issue and the importance of the prevention is emphasized by Government policy. We explored the possibility and direction of the prevention project. The purpose of our study is to investigate how the latent ability of elderly people can be brought out and the elderly with dementia can be accepted by neighbours without prejudice. Our approach is to shape a community with children at its centre. Making use of knowledge resources of elderly people can be promoted by transmitting their experience to children. Moreover, creative dramas collaborated by children and elderly become media by which they communicate with the elderly with dementia. Through the inter-generational communication project, children's conception of the elderly with dementia may be spread to their parents and those around them. As a first step, we constructed a framework of the social system which realizes this process of the project. It was shown by statistics that the children's images towards the elderly with dementia changed positively through the project. However, it remained a difficult issue how to take up the theme of dementia. Most of the children wrote their feelings of fear about dementia and pity for the person, even after they understood dementia as disease separated from the person. As a second step, we introduced a program for children and their related adults to think about the values of ageing, in which we face with various inconvenience. We approach the investigation of the point at issue philosophically, and focus on the viewpoint which is required to accept the elderly with dementia.

１．はじめに

１．１　プロジェクトの背景と戦略

日本では戦後平均寿命が延伸し、今後 2055 年には男性 83 年、女性 90 年に達する予測が示されている[4]。長寿社会の到来は、少子化という要因を孕みながら世界で最も高齢化が進む国、日本の大きな問題として受

け止められている。前例のない高齢社会に応じる対策の必要性が説かれるなか、とりわけ年々増加する認知症高齢者への対応策が焦眉の急となる。将来推計で認知症高齢者数は 2005 年の 169 万人から 20 年後にはほぼ倍に達し、ピークとなる 2040 年には 385 万人に及ぶとされる[5]。介護保険制度の改正から認知症の予防、介護予防に対する重点化が進められ、行政課題として予防事業の展開が喫緊の課題になった。市と大学の連携協定に基づき、市の抱える課題を検討するプロジェクトが発足し、その一環として予防事業の展開方法を探る施策の検討に着手した。

一般高齢者から認知症高齢者に及ぶ一体的な支援方策を検討し、認知症の人を中心とした高齢者支援のコミュニティ形成を図る社会システム構築を目指してプロジェクトを進めた。主な手法としては近年介護予防においても注目を集める回想法の活用を進めた。高齢者の自然な心理を活かし、認知症になっても残りやすい長期記憶や情動機能に訴え、対人交流の活性化を図る。予防プログラムとして他の有力な選択肢には、ドリル形式の手軽にできるタイプのものもある。しかし手軽さの反面一人で内にこもりやすく社会的交流の面で乏しくなるところがある。孤独に陥りやすい認知症高齢者の支援を中心に据えることから他者とのつながりに重点を置き、場合によっては音楽療法なども取り入れやすい回想法を用いた。フィールドは高齢者施設に始まり、市の介護予防教室、そして発展形として小学校での取組みに展開させた。

本稿では、回想法を世代間交流に適用し、平成 18 年度及び 19 年度の二回、アクション・リサーチとして展開している世代間コミュニケーション･プロジェクトに焦点を当てる。市と連携した予防事業の一環であるが、国策として認知症の予防に重点が置かれるなかで敢えてその事業の内部から方向性をシフトさせ、問題を炙り出す試みとしてプロジェクトを進めた。

施策としては高齢者の環境整備を行い、いかにして認知症にならないようにするか、この点が検討課題であった。これに対して第一に事業を世代間交流へと展開し、子どもとの関わりのなかで高齢者の活動に単なる予防の目的を超える積極的な意味づけを行う形でプロジェクトの設計を行った。これは、予防事業の展開方法を開拓することにより、認知症高齢者が否定の対象とみなされることなく、ありのままの姿で受け容れられるよう事業の方向性を探る目的で行ったものである。それゆえ第二に本プロジェクトにおいては、否応無く認知症の進むことをどのように考えるか、どのようにして認知症になっていこうとするか、どのように他者と共に生きていくか、こうした点も検討課題として予防事業の論点を突き詰めることを欠くことはできない。

１．２　本稿の構成

第２章では、回想法実施後の課題を踏まえて、さらに積極的に認知症高齢者を地域で受け容れる仕組みをつくる必要について述べる。第３章では、子どもを起点としたコミュニティ形成の考え方を論じ、第一段階として平成 18 年度に社会システムの〈骨組み〉を築くアクションを振り返る。第４章ではその取組みの結果を考察し、課題を捉えなおす。第５章では、平成 19 年度の第二段階の取組みを加味しながらシステム構築に伴う〈中身〉に関して、認知症を取り上げる際の論点を追究する。第６章では、少子高齢社会に求められる価値基準の問題を取り上げ、認知症高齢者を受容する社会のあり方について論ずる。第７章では、認知症の人へのスティグマを解消する手立てを検討しなおし、アクションを通じて浮上した問題の核心を捉え、本稿の結論とする。最後に、本プロジェクトにおける社会システム構築が秘める可能性を提示し、今後に残された課題を押さえて締めくくる。

２．認知症高齢者を地域で支える

写真 1: グループホームにおける回想法の実践

施設内で認知症高齢者を対象に回想法を実践してきた（写真１）。回想法では体験や習慣に基づく記憶を引き出しやすい様々なテーマを設定し、回想を促す刺激材料を提示してセッションを行う。効果として認知症高齢者の情動機能の回復や意欲の向上などが期待される[6]。実際に意欲的になる、行動的になるなどの変化がみられた。たとえば、お盆をテーマとしたときに翌朝「お墓参りに行く」と言い出し、出かける行動に及んだ例がある。ひとたび意欲的になって外出などの望む行動が出てきたときに周囲の介護者として行動を制止するのか、それとも支援するのか選択を迫られ、回想法のアフターケアという課題が生じることになる。

介護者が一人の入居者の外出にずっと付き添う余裕はなく、支援にあたっては周辺住民の理解と協力が欠かせない。さらに認知症高齢者が地域の行事や集会に出かける積極的な社会参加の機会を得るには受け容れる側の理解と協力が不可欠であるが、実際に聴き取りを行う限り、規模の大きい施設になるほど施設と地域の隔離は著しい。施設として認知症高齢者の外出の機会を設けようとしても受け容れ先は極めて少ないのが現状である。こうした状況では認知症の人に対する誤解や偏見（スティグマ）は解消されず、また高齢者が力を発揮する機会を奪うこと（デスエンパワメント）になる。この点は現在、認知症ケアの主要な考え方として認識されているパーソン・センタード・ケアにおける悪性の社会心理をなすものであり[1]、改善の手立てを要するところである。認知症高齢者の秘めた力を活かし、身近な理解を促す環境づくりへ向けた取組みが必要である。本プロジェクトにおいては、普段は認知症高齢者とあまり関わることのない人々にも支援の関係を築くことができるように配慮し、認知症高齢者を支える地域コミュニティを形成するかたちで社会システム構築を進めた。

３．子どもを起点とするアプローチ

３．１　コミュニティ形成のモデル

認知症高齢者支援の課題として受け容れられる環境を整え、衰えつつも秘めた力を発揮できる場を設け、汚名の烙印を着せるスティグマの解消を図る取組みが必要であることが見定められた。普段から関わりのある介護者や介護福祉の専門家だけでなく、むしろ現時点では関わりは薄くとも、これから増加が見込まれている認知症高齢者自身になることや家族、近所の住人として関わることが出てくるであろう人々の関わりや協力が得られる形で認知症高齢者を取り巻くコミュニティ形成のモデルを考案した。その際に、起点として位置づけられるのは、子ども達である。

図 1: モデル校区におけるプロジェクトの一連の流れ

モデル地区の小学校をフィールドとして、プロジェクトをカリキュラムに導入し、総合の時間を実践の場とした。子どもを起点にコミュニティ形成を図るアプローチとして、児童が校区高齢者の体験談を作品化し、創作劇を媒体に認知症高齢者とのセッションを行う手法を取った（図１）。高齢者の思い出という知識資源を子どもの教育に活用し、認知症高齢者の秘めた力を発揮できる環境を整えて身近な理解が地域の人々に浸透する仕組みを築くという設計である。

なぜ子どもに着目するのか。その点には複数の狙いがある。まず、子どもが認知症ケアに携わることにより、その保護者や近隣住民が関係者として関わってくる。庇護の対象として周りを巻き込む子どもの弱さが価値を持ち、引き立つところである。次に、近隣住民のなかで特に一般高齢者が多くの能力を保ったまま発揮の機会を失っているところに体験や経験に基づく思い出の知、そしてときには身につけた技能をも伝える相手ができることで外出の機会や意欲の向上が期待できる。実際に多くのことを知らない子どもの特性が活かされる。高齢者同士でお喋りをする集まりに

女性が多いのに対し、子どもに知を伝える社会的な役割を担うことに関する男性の参加意欲の高さが期待され、実際にそうした結果になっていた。子どもとのふれあいで多くの刺激を受けることは介護予防の観点から好ましいこととみなされるが、それはおのずと付いてくるものとしてプロジェクトを設計する。また、他面で介護予防教室に通う特定高齢者は一定期間後に教室を卒業することになるが、後の行き先として子どもに招き入れられる。

それから何より、子どもの存在のもつ力は、認知症高齢者と対話するセッションをもつときに発揮されると期待できる。それは自身が子供時分の記憶や子育てをしていた時分の思い出を蘇らせること、つまり子の存在それ自身が長期記憶を刺激し、回想を促すプロンプトとなりうるということである。また、子どもの知らないこと、できないことに価値がある、そういう発想が活かされる。ポイントとして聴き手の重要性に着眼する。だれに届けたい声であるか、伝えたいと思うことか、その送り先として子どもの参加は有意義であると考えられる。そして、普段ケアを受ける立場の認知症高齢者が世話する相手として関心を向け、さらには高齢の自分にしか担えない経験に基づく知を伝える役割意識が生じることも期待される。

３．２　プロジェクト第一段階：平成 18 年度

子どもを起点に認知症高齢者を受け容れる地域コミュニティの形成を図るうえで、第一段階としてその〈骨組み〉を築くことに傾注した。昔の道具などを学ぶ児童４年生が昔の仕事、昔の遊び、自然環境、年中行事をテーマに、博物館の諸々の

道具を用いながら、校区の一般高齢者の回想内容を聴き取った。昭和の記憶を物語として紡ぎだす（写真３）。テーマを絞った聴き取りを進め、創作された物語は劇のかたちで上演された（図４）。あらためて児童は認知症高齢者を学校に招き、創作劇を用いて回想を促し、双方の関心を引き合わせながら対話するセッションの場を設けた（図５）。この一連の流れを実現し、認知症高齢者が社会参加の機会を得て、地域社会に受け容れられるための素地としてシステムの基本構図をつくり上げた。その際、回想法の発展形として

写真 2: 記憶を紡ぐ創作過程

写真 3:『災害とたたかう人々』

写真 4: セッション実施時の様子

展開した本プロジェクトの手法において我々が追究したのは次の点である。「回想法は話し手にとって楽しいだけでなく、聴き手にとっても重要である」[4]。聴き手になるのが、知っていることを問うような大人ではなく真に知らないことを知ろうとする児童であるがゆえに、記憶を呼び覚まされた認知症高齢者の語りは重要度を増す。実施して間に入った地域の大人、高齢者間の年代差も現われ、部分的に知らないことを伺いながら、児童と認知症高齢者をつなぐ支援の役割を自然と果たす形となった。

なお回想劇はイギリスからヨーロッパを中心に発展し、高齢者が自身の記憶を劇化し上演しているもの

がある[3]。日本の介護施設の状況や介護制度、そして風土・文化に合うものであるか未知数であったが、学校の制度にも合わせて展開可能であることが示された。子どもを起点とした認知症高齢者を取り巻くコミュニティ形成に寄与するアプローチであるか未開拓の領域を探り、システムとしての基盤を築けたことは成果である。

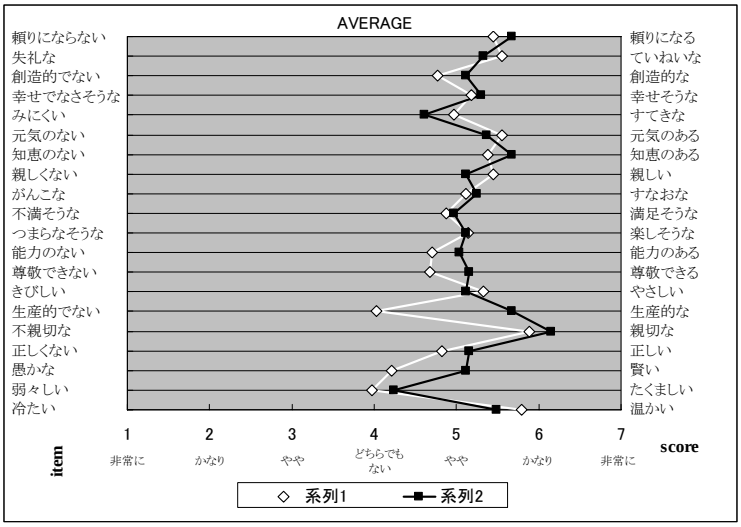
セッションへの参加者は 34 名の児童 4 年生（9-10 歳）と、13 名の認知症高齢者（平均年齢約 90 歳）、同市内の三箇所の施設在住者が中心である。両者の関係を支援するかたちで、そして劇というアートが人をつなぐ材料となり、同伴する施設の介護職員や学校教諭、児童の保護者や近隣住民らが参集した。普段は認知症高齢者に関わることのほとんどない人々が集って身近にふれあい、認知症高齢者を取り巻く人々の関係性が無関係な状態から変化するシステム構築は果たせた。施設に暮らす認知症高齢者が住み慣れた地域に戻って隣人と面会して旧交を温める様子が見受けられ、そうした機会となったことは発見のひとつである。

4．プロジェクト第一段階の結果と考察

回想法の手法を用いて認知症高齢者が秘めた力を発揮する場を設えることにより、周りの人からのスティグマを払拭することを狙い、効果として期待した。その点についてセッション前後の児童の高齢者イメージを調べることで明らかにした。児童に対してセッションの前後で高齢者イメージについてのＳＤ（Semantic Differential）スケールを実施し、結果を分析した。

図２にはＳＤ法 20 項目の回答結果について 1 から 7 の範囲で点数化したものの平均点が示されている。34 名の児童がその範囲で対の語句からなるアンケートに記入した。系列 1 は児童が創作劇を用いて認知症高齢者とセッションを行う前の平均点である。系列 2 はセッション後の平均点である。両側 t 検定（$p<0.5$）の結果、認知症高齢者とのセッションに参加した児童の間では、高齢者のイメージが「愚かな－賢い」と「生産的でない－生産的な」の二項目で肯定的に変化した。つまり、高齢者のイメージが前よりも賢い、生産的とみなされるように変化した。

図 2: ＳＤ項目における平均点のプロフィール



さらに、高齢者のイメージの構造を明らかにするため、20 項目に関して主成分分析を行った[6]。その結果として、高齢者のイメージに関する二つの主成分を抽出した。肯定的に変化したのは「能力のある－能力のない」などの諸因子を含み、何かをできる状態を表す能力面に限られた。親しさを覚えないという結果を受けて、その要因を主に対話場面で高齢者の語りが支配的であったことと考察した。また教える者と教えられる者との上下関係が成立しやすい教育の場、つまり成績に関するような評価がないという意味で対等な関係を築きにくい状況があったと考え、「学び」に対する「遊び」のテーマや教師役の第三者を置くことなどの検討を要するものと判断した。それゆえ平成 19 年度には学内外で遊びを取り上げる追加プログラムを盛り込んだ。

児童が認知症高齢者を能力ある人として捉えたことは、本プロジェクトにおける世代を越えて知を伝える回想法の発展形は認知症の人に対する偏見を防ぐ点で有効であるとの結論を導いた。しかし、セッションに先立って行った「認知症の話」では、それは接し方について学習する場であり、一定の成果を収めたものの課題もまた明らかとなった。その話の要点は、認知症は病気であること、そして認知症になっても何も分からなくなるのではなく感情は長く残ること、であった。そのほか接するときは「ゆっくりと大きな声で」とか、同じことを繰り返し話しても「さっき言った」

などとは言わないようにすることとか、基本的な注意事項を告げた。この注意点はよく伝わり、セッション後の感想文にも非難の言葉を言わないようにする配慮をしていたと記す子どもが多くみられ話の成果はあったと考えられる。とはいえ、「認知症の話」の後の感想文では、模範的な回答を記す子どもがいる一方で下記のように記す子が多くみられた。

「昔の事をおもいだしたりする事があるそうです。私は認知症にかかると、何もかも忘れるのがすごくかわいそうだと思いました。私はにんちしょうにぜったいかかりたくないと思いました」

「にんちしょうでゆっくり言わないと分からないのがかわいそうでした」

「ちょっとまえにいったこともわすれてもういちどきくのがへんだとおもいました。それで、わたしは認知症になるとこわいなとおもいました」

「にんちしょうになると昔にさかのぼったり、ものわすれがひどくなったりしていくので、にんちしょうはとってもこわいですからにんちしょうにぜったいなりたくないです」

一部誤解があるのも課題であるが、半数の児童が「かわいそう」「こわい」「なりたくない」と記述し、認知症の人への哀れみや認知症への恐怖を示したことは検討を要する課題となった。最初から認知症を「理解」させること、教えるという態度で臨むこと自体に問題はなかったか、そして認知症を病気とみなし人としてのあり方から切り離してみても、認知症そのものはなってはならないもの、認知症の人はなってはならないものになった、もはやあってはならない者として位置づけられる構図は解消されないのではないか、これらの論点を追究する課題が残された。

５．　プロジェクト第二段階：平成 19 年度

二年目に入った小学校でのプロジェクトは、一年目が 12 月中旬から 3 月初旬までの間の実質 2 ヶ月程度で行ったのに対し、2 学期の初め 9 月下旬から 3 月初旬までの長期間で行う。同じく、5 年生にかけて高齢者イメージが否定的に転じていく時期の 4 年生を対象に実施し、第一に高齢者に慣れて親しみを覚える関係づくりを進めた。一般高齢者側の変化として、他の高齢者の参加を促す世話役の高齢者が現われたこと、そして児童との取組みを老人会で取り上げようとする声が出てきたことなどが挙げられる。プロジェクトの継続性を考慮した際に自治組織の活用は重要な要素であり、世話役になる人や民生委員といったキーパーソンを押さえ、そして博物館という高齢者ネットワークの拠点、求心力をもつところを押さえてコミュニティの形成と拡張を促す知、地域の組織的なダイナミズムをもたらす知の構築が課題となる。

さて、前年度との違いとして最も大きな点は、システムの〈骨組み〉ができたところで〈中身〉を充実させることである。昨年度の課題として認知症を前面に押し出した形で「説明する」「理解させる」「教える」こうした知識の教授が認知症への恐怖を植えつける結果が示されていた。認知症は病気であり、その人には何も咎められるべきことはないという知識を得て、認知症とその人とを切り離したところで事態は変わらない。スティグマの根がどこにあるのかを探らなければならない。パーソン・センタード・ケアの考え方もそこに限界が見受けられる。認知症のことを児童にどのように伝えるか、この点がいま困難な課題として浮上しているわけであるが、そこには予防事業の問題の根本が現われている。予防事業において認知症は回避すべきものとして位置づけられるが、裏返して言えば、すでに認知症を抱える人は望まれない存在とされることになる。医療の観点から認知症を病気とみなし、人としてのあり方から切り離しても、認知症にはならないことが望ましいという見方は変わらない。予防の観点からは本人の努力不足として咎められることにもなりかねない。認知症を病気として取り上げ、説明する以前に、不自由を抱えて生きることへのまなざしがどのような価値観のもとに成り立っているのか、いまやその点を問いなおす作業が必要であろう。

６．　問われる価値基準

人は老いゆくなかで「できないこと」が増え、様々な不自由を抱える。介護を必要とするようになり、認知症になったとしても、厄介者や努力の足りない怠惰

な者、落伍者や欠如態の者としてレッテルを貼られることなく、その人の存在価値が認められるためには「できること」にのみ価値を置いていては価値の見出しようがない。そうした従来の価値基準こそが見なおされなければならない。できることにのみ価値の基準を置くかぎり、できないことを増していく高齢者が無価値の存在として烙印を押される構図は解消されない。できることにのみとらわれている限り、認知症の人へのスティグマが払拭されることはない。

また学校教育の評価制度にも同じ構図があり、様々なことができないままの子どもが他者に受け容れられ、そして他者を受け容れられるための価値観が求められることになる。できないことに価値が見出される関係づくりが課題になるところで子どもと高齢者の、とりわけ不自由を抱えた認知症高齢者の相性の良さが見出される。しかし見誤ってはならないのは、価値基準をその人の存在そのものに据えなおす視座を得ることが最も求められているのが、他でもない、自身はまだできる者であることに安寧としている大人自身の価値観であるということである。他のだれにも世話にならずに完全に自立した生活をしていると錯覚していられるのは、ただ自身を支える他者の手が諸々の公共サービスによって見えにくい形で提供されているからに過ぎない。

7. 価値観の創造

本プロジェクトにおける地域社会のシステム構築は、その骨組みに加え、老いの価値をも問いながら予防事業に本質的な方向性を付与するものである。プロジェクトの一環として「老い」の捉え方をテーマに取り上げ、子どもと共に老いゆくことの価値を考える機会を設けた（図５）。授業参観時に保護者や一般高齢者も参加したワークショップである。おとぎ話を題材に、浦島太郎になったことを想像してなぜ老いたのか、老いることは罰なのか、そうしたことを考えた。村人の立場でも考え、浦島太郎がやってきたらどうするか、どのように迎え入れるかなどを話し合った。普段は教えるだけの大人、ひとつの答えを教わることに慣らされていく子ども、共に考える形で、それぞれのスタイルを変えてみる。そうして新たな考え方や価値観を創造していくコミュニティ形成を促すものへとシステムをつくり上げていく必要がある。システムを補うプログラムとして、他者と共に老いてゆく価値を考える場を導入し、不自由を蓄えた生へのまなざしを地域で育むことへの方向性は示された。

写真５：子どもと共に地域で老いの価値を考える

浦島太郎が乙姫から玉手箱をもらい、それを開けて突然老人になる、考えてみればこれはなんとも不思議な話である。たとえば亀を助けてあげたのにそんな土産を渡した乙姫は酷い人だと考えるなら、それはつまり、老いることを、ならないに越したことはないと考える発想をもっていることを意味する。老いとはそう容易く手に入るものではない宝物なのだという解釈がある。ここで問い考えてみたいのは、なぜ老いることには価値があるのかということである。老いのなかで抱える不自由に実は価値ある自由があるのではないか、そうしたことを考えてみたい。

そもそも価値あるものというのをどのように捉えたら良いか。価値あるものを考えるときに、それを理想のようにそれだけで完結した純粋なものと捉えることは唯一の捉え方ではないと考えられる。たとえば価値ある美術品が完成したものとの印象を与えるように、価値を完成形態から考えることもできるに違いない。しかし、それが唯一の価値観だというわけではない。自由について言えば、「価値ある自由とは、純粋な自由ではなくて、むしろ拘束と一つになった自由である」[7]とする価値観もありうる。他者の自由にさらされるという拘束、その不自由と一体になった自由こそが価値ある自由であるという価値観である。老いて他者の助けを必要とするところに、あるいは他者

の介護に拘束されて苦労するところに、独りで完結した自立的な生という理想、幻想とは異なる自由の価値があるのではないか。また、テレオロジー（目的論）を加味すれば、テロス（終極、目的、完成）の状態から差し引いて今の不完全な状態の価値をみるのではなく、今への拘束、今の不自由を生きることに価値が見出せる、そうした価値観を創造していく共同体のあり方が探っていくべきものではないだろうか。その実どこにもありはしない、極限の出来上がった「成人」という理想を基準に人間の完全な姿、完成態から人をみるような人間観から脱却し、相対化する視座を得ることが欠かせない。つねに生成途上にあって変化する人のあり方に価値を置く視座が得られなければ、認知症高齢者は人の「本来の」姿の欠如態とみなされざるを得ず、受け容れられることにはならない。予防事業の進展により促進されかねない認知症への恐怖、人間の否定、その視線を克服する人間観の創造が今後ますます重要な課題となる。

８．　おわりに

本プロジェクトにおけるシステム構築を振り返り、認知症高齢者を取り巻くコミュニティ形成は今後、アーティストの参加という形態を取ることになれば格段に加速されるものと考えられる。こうした介護福祉においてアートのもつ人をつなげる力が発揮される仕組みを築くことは大きな可能性を秘めている。

また、劇や絵、遊び道具などプロジェクトの作品群、劇の映像記録を予防教室や施設の回想法で活用することは、埋もれていた道具を活用するという従来の発想に留まらない創作活動としての回想法の発展性をもたらすものと考えられる。施設と学校の交流を促す通信技術の活用、児童らの発想支援を促す技法の活用や整理も検討課題として残された。

さらに、認知症高齢者の情動反応を生体データに着目し、センサを用いた測定を進めている。解析を進めるとともに、その一方で、物体ではなく生身のからだをもつ人間に対する見方を反映した人間科学のあり方を問いなおすことが今後の課題として生じてくる。生へのまなざしがどのように科学・技術の展開と支え合うものであるか、その点の追究が科学、あるいはさらに広い意味における学としての知のあり方を問う知識科学に課せられているものと考えられる。

謝辞

本研究の一部は, 文部科学省知的クラスター創成事業石川ハイテク・センシング・クラスターにおける「アウェアホームのためのアウェア技術の開発研究」プロジェクトの一環として行われたものである。また、北陸先端科学技術大学院大学と能美市の学官連携協定に基づく「認知症高齢者の増加を防ぐための環境システムの構築」プロジェクト、及び、文部科学省「グループワークによる知識創造教育」公募提案型研究助成における「高齢者の残存能力・潜在能力を有効活用する社会システムの構築」プロジェクトの一環としても行われた。大阪大学 CSCD の西川勝特任准教授にはワークショップの題材提供や実践にご協力いただいた。関係者の皆様に、ここに深く感謝の意を表する。

参考文献

[1] Coleman, P., Bornat, J. (Ed.), *Reminiscence reviewed: Evaluations, achievements, perspectives*, Open University Press, p.13, 1994

[2] Ryuji Yamazaki and Tsutomu Fujinami, The Application of Creative Drama to Dementia Care:A Case Study of the Intergenerational Reminiscence Project in Japan, *International Reminiscence and Life Review Conference 2007 Selected Conference Papers and Proceedings*, University of Wisconsin-Superior,Center for Continuing Education/ Extension, pp. 391-407, 2007

[3] Schweitzer, P., *Reminiscence Theatre: Making Theatre from Memories*, Jessica Kingsley Publisher, 2007

[4] 共生社会政策統括官，高齢社会白書，内閣府，2007

[5] 高齢者介護研究会報告書，厚生労働省，2002

[6] 野村豊子，『回想法とライフレビュー―その理論と技法』，中央法規，1998

[7] 『メルロ＝ポンティ―超越の根源相』，実川敏夫，創文社，p.300，2000